石神遺跡第１０次調査現地説明会資料

1991年10月19日

奈良国立文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部

はじめに

1902年（明治35年）に噴水と考えられる須弥山石と石人像（飛鳥資料館に展示中）が偶然掘り出されてから、この石神遺跡は斉明天皇の時代（７世紀中ごろ）にトカラ人（現在のタイ国メコン川下流にあった王国？）や、多彌嶋人（現在の種子島）、蝦夷や隼人、粛慎（みしはせ）などの人々を迎えて饗宴がたびたび開かれた場所と考えられてきました。『日本書紀』には、657～660年（斉明３～６年）のこととして、「飛鳥寺の西に須弥山を作り、トカラの人に饗たまふ」とか、「甘樹丘の東の川上（かはら）に須弥山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ」とか、「石上池の辺に須弥山を作る、高さ廟塔のごとし、もって粛慎四十七人に饗たまふ」といった記事がしばしばみえるからです。

この石神遺跡の南には、東西方向に延びる大垣によって隔てられた水落遺跡があります。ここからは、1981年に水時計の遺構が発見されて一躍有名になりました。発掘された遺構は、水時計とこれを設置するために堅固に作られた楼状建物、掘立柱の付属建物などで、『日本書紀』に、「斉明天皇の６年（660)に中大兄皇子が初めて漏刻（水時計）を造った」と記す漏刻台であることが確かめられました。現在は国の史跡に指定され、遺構をわかりやすく展示する整備も終わっています。

当調査部では1981年から、この二つの遺跡の発掘調査に取り組み、今回で第10次調査を迎えました。第１・２次調査では、須弥山石や石人像が見つかった水田とその北を調査し、第３次調査以降は、旧飛鳥小学校の東側の道に沿って水田を１筆づつ調査し、これまでに、石敷の広場や複雑に延びる石組溝、石敷をめぐらした大きな井戸、回廊に囲まれた大規模な建物などの多くの遺構が見つかり、遺跡の南北の規模が160m以上に及ぶことを明らかにするなどの成果をあげてきました。

今年度からは旧飛鳥小学校の校庭（小字唐木）を４回にわけて調査する予定になりました。石神遺跡と水落遺跡を隔てる東西大垣が西へどこまで延びているのか、石神遺跡を大きく東西に区画する南北方向に延びる長い建物が東西大垣にとりつくのか、とりつかないで回廊状に西に折れ曲がるのか、水落遺跡から北へ延びる細い銅管や木樋の行き先がどうなるのか、など両遺跡の関連をよりはっきりさせることを目的に７月８日から調査を続けてきました。今回の調査区（東西約40m、南北17.5m、調査面積は約670㎡）は第３次調査区の西にあたり、１棟だけ残されている旧校舎を隔てて水落遺跡の北にあたり、石神遺跡と水落遺跡の境界線上を掘ることになります。これで、これまでの調査総面積は11120㎡になりました。調査はなお継続中で、遺構や遺物を詳しく検討しなければ解決できない問題もありますが、これまでに明らかになった点を中心に、その概要を紹介します。

遺構

石神遺跡の遺構は７世紀中頃から８世紀前半にかけて作られたものが主ですが、これまでの調査結果から、大きくＡ期（７世紀中頃：斉明天皇の時代）、Ｂ期（７世紀後半：天武天皇の時代）、Ｃ期（７世紀末～８世紀初頭：藤原宮に都があった時代）、Ｄ期（８世紀前半：奈良時代）にわけられます。今回はこのうち、建物が一番整然と建てられたＡ期の饗宴の施設と考えられる遺構を中心に、Ｂ・Ｃ期の遺構が少し見つかっています。

Ａ期は、飛鳥寺の寺域の北に東西大垣ＳＡ600が作られ、その北側に石神遺跡、その南側に水落遺跡が形成された時期です。

東西大垣ＳＡ600は、一辺が約1.5～２m、深さが約２mもある大きな柱穴を掘り、中に太さ36cmほどの柱を2.55m間隔に立て並べてその間を土壁でふさぎ、板か檜皮を葺いた屋根と、幅約３m、高さ0.3mの低い基壇をもつ立派な１本柱塀です。柱を立ててから整地土を盛って基壇を築いているために、整地土の上からは柱を立てるために掘った柱掘形は見えません。今回は整地土を取り除いて、調査区の東側で４間分（ただし、柱と柱の間の寸法がここでは約３mと広い）、西側で７間分（ここは柱間寸法が2.55m）が見つかりました。しかし、約８m（およそ３間分）の間に柱穴は見つからず、この間が水落遺跡と石神遺跡を結ぶ通路として利用されていたらしいことがわかりました。

そこで、今回検出したＡ期の遺構は、

１．東西大垣ＳＡ600の南に広がる水落遺跡に属する遺構。
２．水落遺跡と石神遺跡を結ぶ遺構。
３．ＳＡ600の北に広がる石神遺跡に属する遺構。

に分けて考えることができます。

①水落遺跡に属する遺構としては、東西大垣ＳＡ600の南に広がる石敷01とＳＡ600の基壇の南端を流れる石組溝01があります。石敷01は、東西方向の溝や自然流路によってかなり壊されていますが、もとは全面が石敷で舗装されていたと考えられます。石組溝01は、幅約0.5mの浅い溝で底石の一部が残っているだけですが、ＳＡ600の南の雨落溝と考えられます。そうすると、ＳＡ600の軒は２m近く出ていたことになります。

②水落遺跡と石神遺跡を結ぶ遺構としては、石敷で舗装した通路01、水落遺跡の水時計遺構の中心から北へほぼまっすぐに延びる銅管（外径1.2cm、内径0.9cm）と木樋Ｅ（幅約30cm）を埋設するために掘られた掘形（幅約1.5m）、および斉明朝の建物が焼けた後に銅管や木樋を抜き取った抜取り溝（幅約0.6m）、おなじく水落遺跡から北北西に延びる木樋

Hの掘形（幅約2.5m）とその抜取り溝（幅約１m）があります。このうち、銅管・木樋の掘形も埋設後に整地土を盛り、その上を石敷で舗装しているために、整地土を取り除かないと見えません。なお、今回の調査で、銅管と木樋Eは水落遺跡の中心から約50m以上北へ延びていることがわかりました。

③石神遺跡に属す遺構としては、ＳＡ600の北に広がる石敷02、ＳＡ600の約５m北を西へ流れる石組溝02、通路01の西側を限る南北塀01、調査区の北辺に沿って検出した柱列01があります。石敷02も後世の穴や溝でかなり壊されていますが、もとは全面が石敷で舗装されていました。石組溝02にむかって緩やかな傾斜をもっており、この辺りの水を石組溝02に排水する工夫がこらされています。石組溝02は幅約１m、深さ約30cmの規模がありますが、側石のほとんどを失い、底石もその大部分が抜き取られています。南北塀01は、東西大垣600と柱列01をつなぐ４本の柱からなる塀です。一辺が約1.5mの柱掘形を掘って２m間隔に柱を立てています。この柱掘形も柱を立ててから整地し石敷で舗装しているために整地土の上からは見えません。柱列01は、ＳＡ600から北へ10.5m離れており、柱掘形と柱抜取り穴が計15本分見つかりました。今回の調査区内の所見だけでは、東西棟の建物になるのか、東西塀になるのか決められませんが、柱はほぼ同じ線上に立てられており、すべての柱抜取り穴にも焼けた壁土の破片を多量に含む焼土が充満しているので、一連の遺構と考えられます。しかし、南北塀から西側の８間分の柱間寸法が約2.3mであるのに対し、東側の６間分の柱間寸法が約2.5mと異なり、しかも、東から３間目の柱間寸法が3.5mと広く、東と西では構造が違う建物であった可能性が高いと思われます。この柱掘形も整地土を取り除かないと見えません。なお、この柱列01と、銅管と木樋E、および木樋Hとの新旧の関係は、柱を立てた後で銅管と木樋が埋設され、柱列01が焼失した後に柱と銅管・木樋が抜き取られていることがわかりました。

B期は、天武天皇の時代にA期の遺構をすべて取り壊し、新たに整地をおこなって全く配置の異なる建物群が建設された時期です。今回は、A期の東西大垣ＳＡ600の南約1.2mにある東西塀ＳＡ560の西延長部を７間分（柱間寸法2.55m）検出しました。この東西塀ＳＡ560はＳＡ600と柱間寸法がまったく同じであり、A期と同じく通路部分には柱穴が見つからないので、もしかするとＳＡ560もA期の後半の時期に作られた可能性が今回の調査で出てきました。また、この時期の建物と推定されるものに、調査区の北西部で検出した東西方向の柱列02があります。６間分（柱間寸法約2.3m）を検出しただけで他の柱穴が見つかっていませんが、おそらく東西棟建物になると思われます。

C期は、B期の遺構がすべて取り壊され、小規模な建物や井戸が作られた時期です。今回は調査区の全域で大小の土坑（ゴミを捨てた穴）がたくさん見つかっただけで、建物などはみつかっていません。

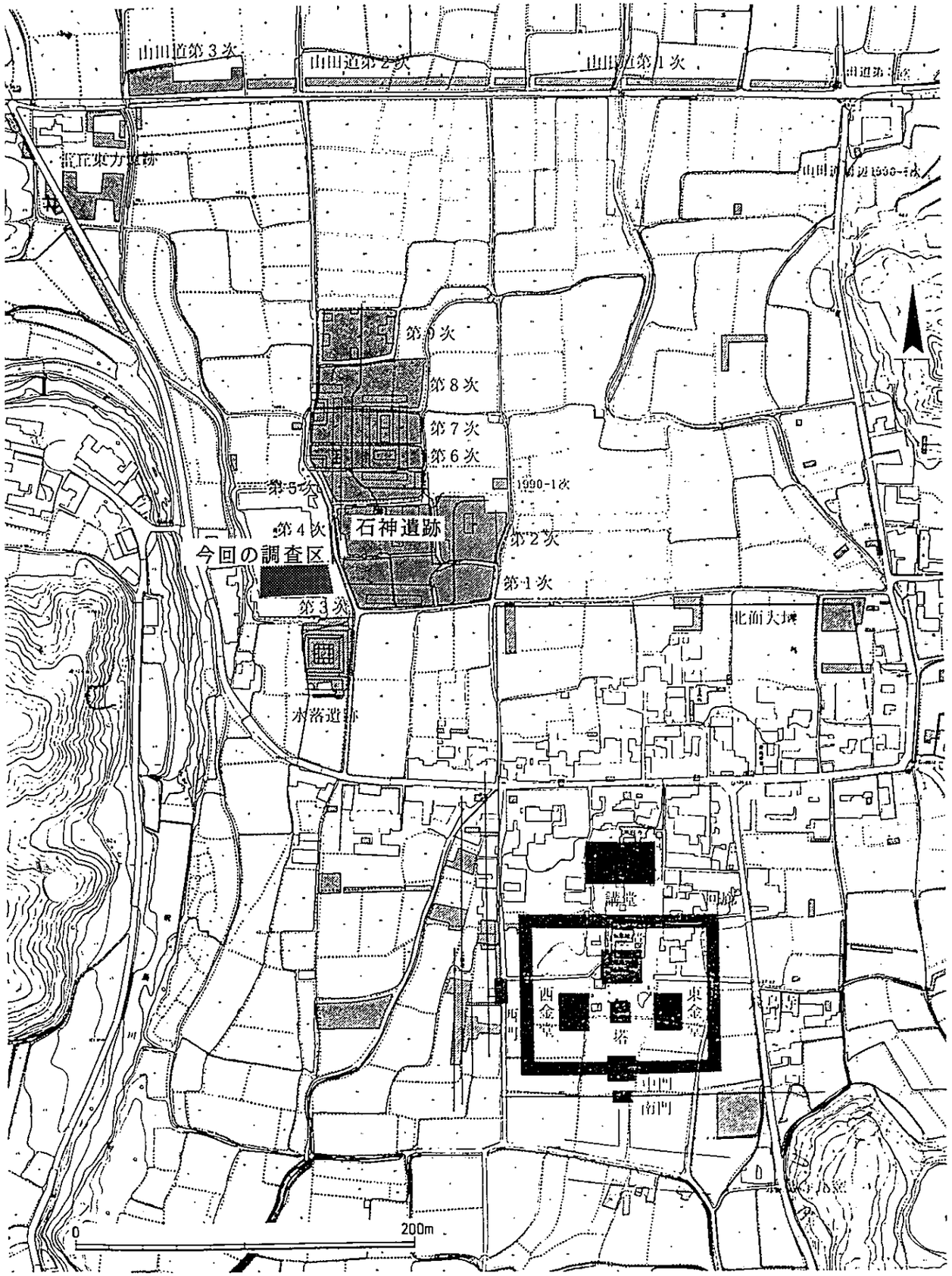
C期以降の遺構としては、東西溝３条、いくつかの土坑、自然流路２条などが見つかりましたが時期・性格ともいまひとつよくわからない点があります。調査区の西南隅で検出した自然流路02は、飛鳥川の水が一時期ここまで及んだことを示しており、水落遺跡の西側を大きく削る崖と一連のものと思われます。なお、調査区の東南部で検出した自然流路01には鎌倉時代頃の瓦器の破片が含まれており、この辺りを流れていた水路がその頃氾濫して柱穴や石敷を激しく削りとったものと思われます。その底にA期の遺構がかろうじて残されています。

出土遺物

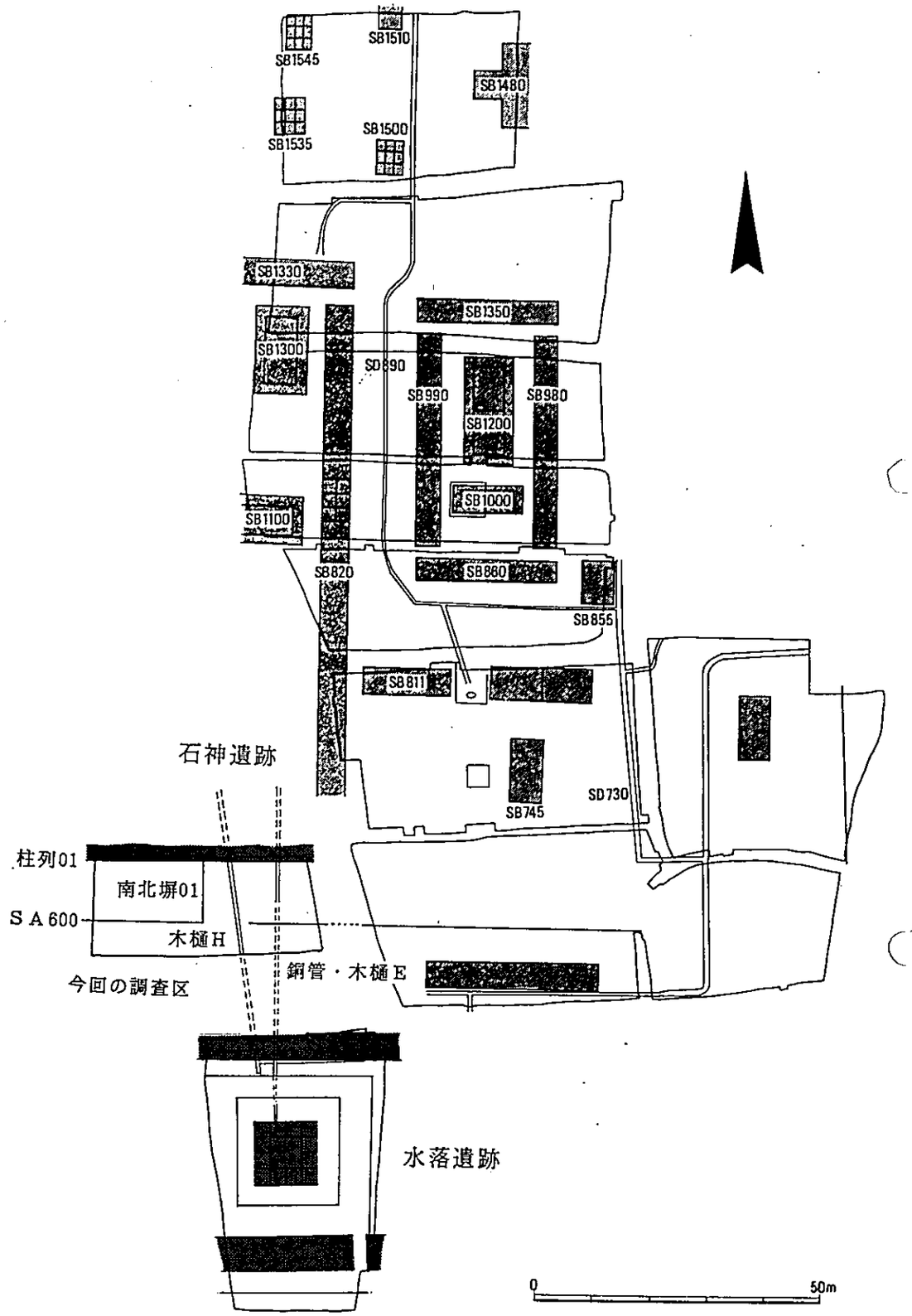
出土した遺物の大半は、C期の土坑群から出土した土師器と須恵器です。この他に同時期と思われる鉄製品・石製品・土製品が少量あり、瓦もごく少量ですが見つかっています。なお、A期の柱の抜取り穴から大量の焼けた壁土の破片が出土していますが、そのなかには、白土の上塗が残る例もあります。また、縄文時代・弥生時代・古墳時代の土器や石器、中世の瓦器などもごく少量ですが見つかっています。

まとめ

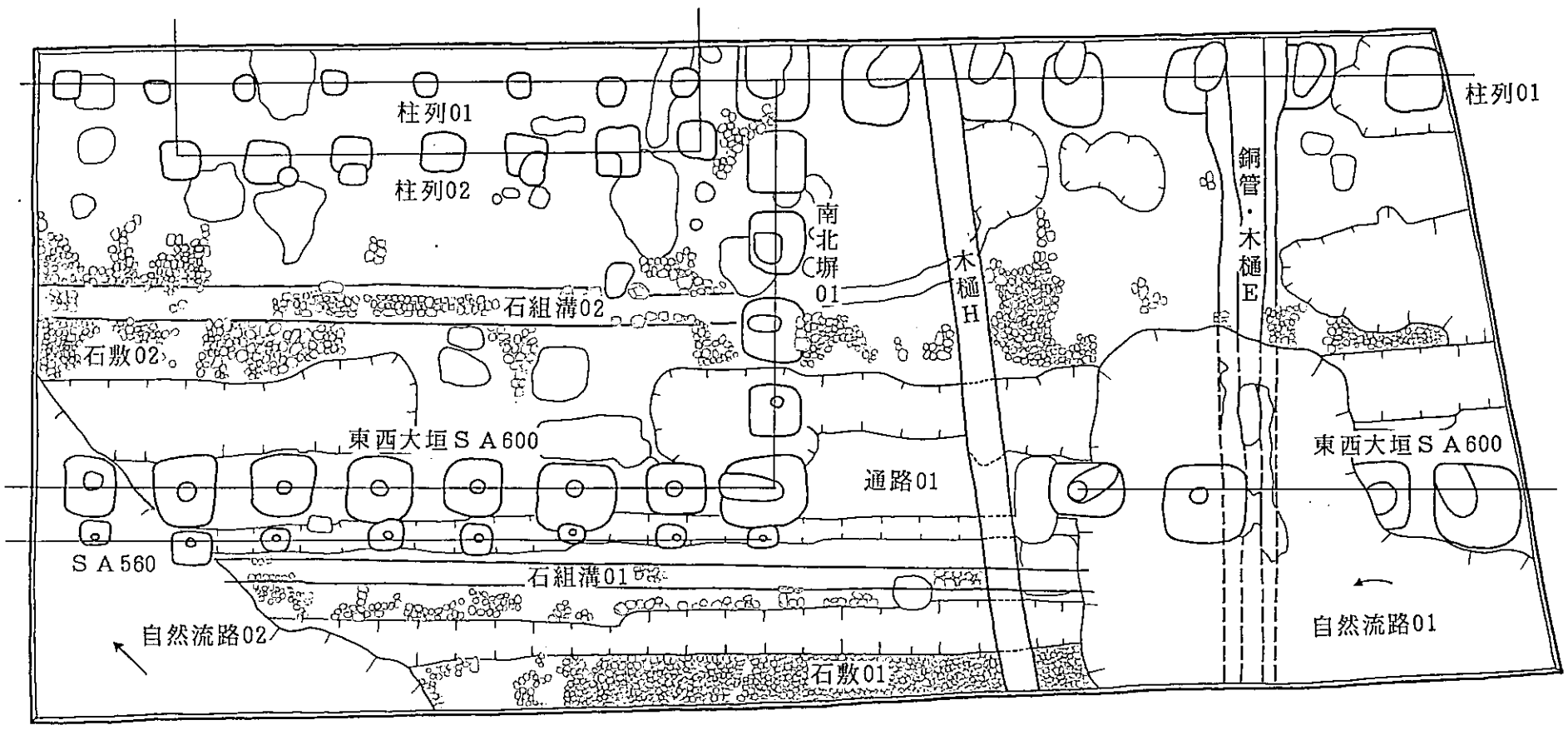
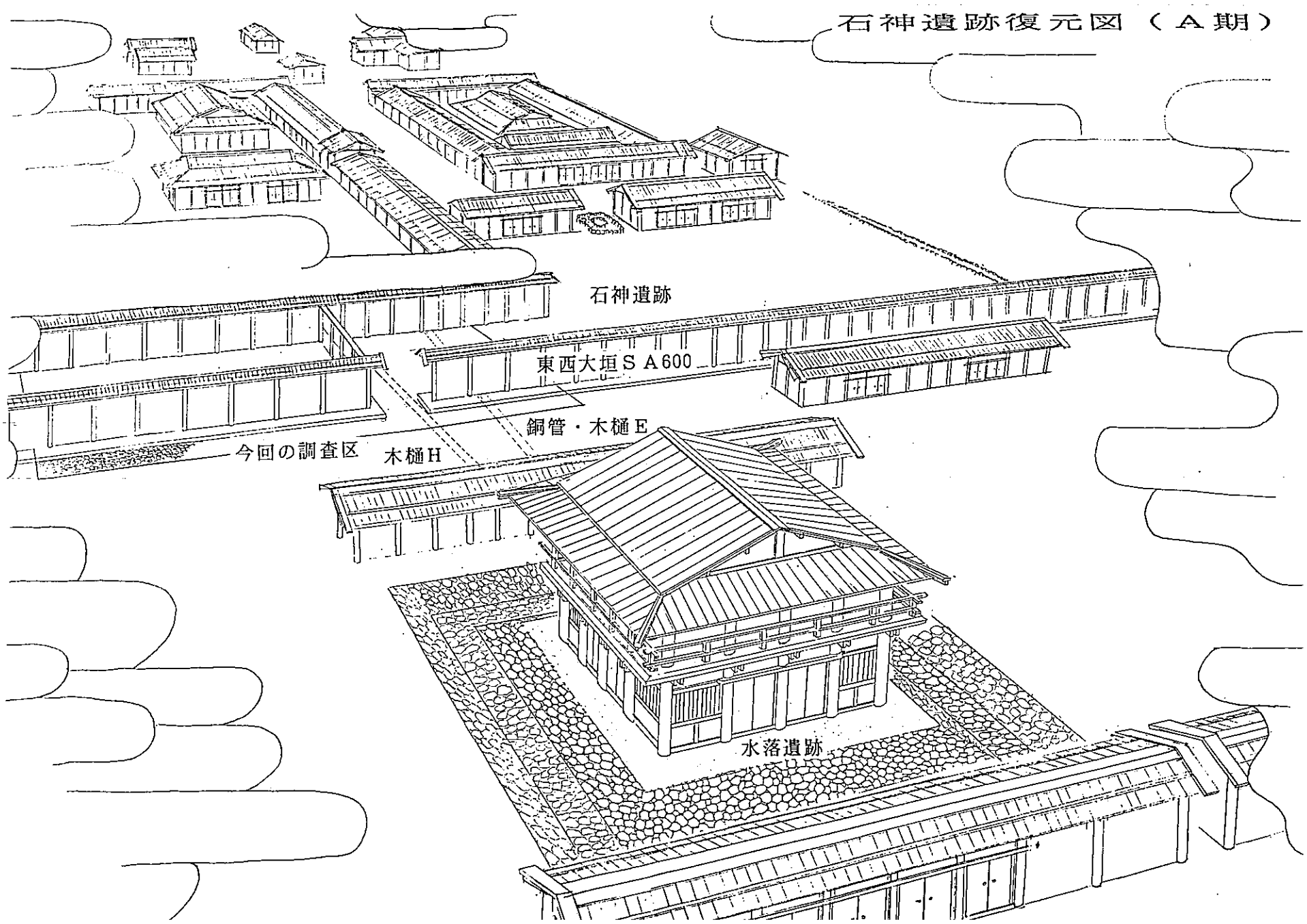
今回は水落遺跡と石神遺跡を隔てる東西大垣の周辺を調査したために、見つかった遺構はこれまでの調査にくらべるとかなり少ないものとなりました。しかし、ふたつの遺跡が飛鳥川の川岸近くまで広がっており、その東西の規模が少なくとも130m以上に及ぶこと、これまで考えられてきたように、この二つの遺跡が東西大垣ＳＡ600で別の空間としてはっきりと分けられていたのではなく、二つの遺跡を結ぶ通路があり、二つの遺跡が一帯の空間として利用されていたことなどがわかりました。また、時計台である水落遺跡の中心部から北へ延びる銅管や木樋を用いた水利用の施設が、石神遺跡の西にある区画の奥深くまで延びていることがわかるなどの成果も得られました。銅管と木樋Eは、水落遺跡からまっすぐ北へ50m以上も延びていることがわかりましたが、この銅管は、時計台の高い楼状建物に一旦汲み上げた水をサイフォンの原理を応用して噴水などの施設に水を流すために使われたと推定されます。木樋EやHも石神遺跡の中に水を供給するための設備と考えられ、これらの水を利用した施設の終点が今後の調査で解明されることが大いに期待されます。



石神遺跡周辺調査位置図



石神遺跡主要遺構図（Ａ期）



石神遺跡第１０次調査遺構配置図